『初心仮名遣』における和語の「い・ひ・ゐ」について

久保田　篤

一

江戸時代前期の仮名遣書は、（契沖の著作を除くと）基本的には定家仮名遣いに従う[1]ものであり、『初心仮名遣』（元禄四年刊）も例外ではない。その点は、序文に、

引用ゆる所二人丸秘抄の仮名遣于世定家仮名遣といふありこれを初めとして先達の古書によりてまじへ集めて記す者なり（序二オ）

とあることからも分かる。世に「定家仮名遣」というとして、ここでまず唯一書名を挙げる「二人丸秘抄」は、『仮名文字遣』であると考えられる[2]。（同じく元禄期に刊行された『蜆縮涼鼓集』には、『仮名文字遣』を「二人丸秘抄」とする誤りを指摘する記述がある[3]。なお、この「二人丸秘抄」を『人丸秘抄』とする解説等もあるが[4]、「二人丸秘抄」によるとする部分の内容から見てそうとは考えられない。）

しかし一方、この書には「二人丸秘抄」の誤りを記す部分もある。最初に仮名別に幾つかの法則等[5]を少し示した後、上段に誤りを掲げ中段で正しい仮名遣いを示すという独自の形式で知られる本体部分が続き、これが本書の大部分を占めるが、この本体部分の後に更に「二人丸秘抄　両用仮名之分」「同唱によつて替仮名」「同抄誤之分」という部分等が続く。この「同抄誤之分」の初めには、

私云案スルニ是元来ノ作ニハアラジ後人加筆ノ誤リ或展転書写ノ誤トミルベシ所レ誤左ニ見エタリ但自是下了見先人ノ作書ニ号二スル仮名遣一歩抄一者アリ是益アル書也故ニ彼旨ヲ以テ童蒙ノ意得易カラン事ヲ思フ而已（一一〇オ）

と記し、以下「仮名遣一歩抄」を利用した記述をしている。この「一歩抄」は、この書名と、記されている内容から、『一歩』（延宝四年刊）であることが明らかである。

ところで、山田（一九四三）は、この『一歩』や、『初心仮名遣』を挙げた後、「それらが、大抵定家仮名遣の誤を訂すといはざるものなきは時運の動きを語るものとして注目すべきことにして世間が定家仮名遣に対して多少不信認の念を抱くに至れることを洩せるものと見らる」と述べる。このような、当時の、定家仮名遣いに対する疑問がどのようなことから生じ、どのような訂正をしようとした

のかという点について探ってみたい。

『一歩』は上下巻から成るが、そのうち仮名遣いについて述べるのは下巻の「一歩　仮名違」である。この下巻の序文に「今是に記すは通ひ仮名のみ也」と記しているとおり、『一歩』が扱ったのは主として活用語尾の仮名遣いである。従って、『一歩』が実行した定家仮名遣いの訂正は、活用に基づく訂正であった。どんな仮名遣いを正しいとするかは立場によって変わろうが、『一歩』の訂正は概ね妥当であると言い得る。(6)

では『初心仮名遣』の場合はどうであったのか。右に示した「同抄誤之分」で指摘する誤り及びその訂正は、「彼旨ヲ以テ」とあることからも窺えるが、全面的に『一歩』に頼っている。このことから、まずは活用語尾について、『初心仮名遣』の示す仮名遣いの検討を、久保田（二〇一四）において行った。「同抄誤之分」では『一歩』に従って、例えば、「すいて吸　是誤也」（一一〇オ）、「なひて泣　とひて説　是誤也」（一一一オ）とするのに、本体部分の方では、

すいて　すひて〔いトモ〕　同〈前行「吸」〉（一〇七ウ）

ないて　なひて　泣　鳴　啼（八五ウ）

となっていて、「すひて」を掲げるものの「い」も認めてしまったり、誤りのはずの「なひて」を正しいものとして示してしまったりしている。この「なひて」や、「いさぎよひ」等について安田（一九九四）は「一歩を承けた初心仮名遣においても、泣・鳴・啼に対して、「ないて」でなく「なひて」、潔・浄に対して、「いさぎよい」でなく「いさぎよひ」であるべき主張、他界（貴人ノ死也）に対して、「たかい」でなく「たかひ」とした事実は、和語・字音語の別なく、この種のヒ・フ表記の根強さを物語るものであろう」と述べる。これらのいわば誤りは、当時の意識が窺える興味深い点であるが、右の「すひて」に「い」も認める主張は、『仮名文字遣』と合致することから、それを取り入れた結果かとも考えられる。しかしさすがに、『一歩』の巻頭に掲げられる「したがえて」については、「同抄誤之分」において「随の字をしたがえてと有是誤也への字也」（一一〇ウ）と記し、本体部分でも

したかゑて　したがへて　随（一〇三ウ）

としている。更に、漢字表記「随」の下には「二人ーニハシタガエト／アリ如何」と記し、『仮名文字遣』の「したがえて」に対する疑問を述べている。ただ、一応「二人ーー」の説も示し、また疑問を呈するにとどまっている点には、やはり『仮名文字遣』を尊重する態度が感じられなくもない。

このように、誤りを指摘する部分を設けながらも結局は『仮名文字遣』に従っているので、活用語尾の検討からは『仮名文字遣』の重視が窺えるが、活用語尾以外の仮名遣いも当然見る必要があるであろう。収録されている語がかなり多いため、今回はその手始めとして仮名「い」「ひ」「ゑ」を用いる語を取り上げ、示されている仮名遣いの検討を行うことにする。久保田（二〇一四）では、仮名遣いの検討の際一般的に行われるように（また『初心仮名遣』では終止形の隣に連用形名詞化を掲げる場合が非常に多いということから

も）連用形の名詞化したものについても見た。その際、最も多い四段活用動詞連用形が名詞化したものの検討との関連から、語末「い・ひ・ゐ」の名詞等についても簡単に見たのであるが、更に詳しく検討する必要を感じた。また、「は・わ」から始めるのが一般的ではあるが、『初心仮名遣』が示す語中語尾のワ音の表記は、殆どが「は」（一五〇語以上）であり、「わ」を正しいとする語は「のわき」（野分）・「みわ」（三輪）・「かみわざ」・「かなわ」（鉄輪）・「ことわざ」・「しわざ」等あまり多くなく、これら「わ」の語もいわば常識的である。一方「い・ひ・ゐ」については、和語の語中語尾にも「い」[7]が比較的多い等、注目すべき点があり、まずは追及すべき部分であると考えられるのである。

なお、字音語を多く掲げる点も『初心仮名遣』の特徴の一つではあるが、この書の字音語については、安田（一九九四）が幾つか「―う」「―ふ」を取り上げて「解し難い」と述べる[8]ことからも窺えるように、不可解なところが見られる。「い・ひ・ゐ」に関しても、序文の後の「初心仮名遣」巻頭の、規則等を述べた部分に、

はしのいを書は頭にいといふ時と文字を音に読／時いととまる字は皆いの字也と知へし（序五オ）

と記されるのではあるが、字音「―イ」の多くは「―い」となってはいるものの、

せい。せひ　誓　（三〇オ）
たかい。〔貴人ノ死也〕　たかひ　他界　（八二ウ）
へい。へゐ　幣　（一四ウ）

などのように、安田（一九九四）にも示されていた「たかひ」も含め、規則とは異なる「ひ」や「ゐ」の掲示が見られる。「愛」を「あひ」とする、

にんあい。にんあひ　人愛　（六八ウ）
ちやうあい　てうあひ　寵愛　（九八オ）
あい。〔あいらし／あいする〕あひ　愛　（同）
あいなし　あひなし　無愛　（同）

などは、当時の意識では「音」ではなかったかとも窺われ、また『仮名文字遣』板本に「あひして　愛」（ひ部）とあるのに従ったとも見られるが、同じく「愛」字の語に、

あいげう　あいぎやう　愛敬　（九八オ）

という「あい」が右の「あひ　愛」と同じ頁にあったり、また「たかひ」の「界」も、

くがひ。くかい　公界　（八九オ）

のように「い」を示す場合もあるなど、不統一なところが散見する。『初心仮名遣』の字音語は今のところは検討の対象としにくいと言わざるを得ない。

以上のような点から、今回検討の対象とするのは、活用語尾（連用形名詞化の語尾を含む）以外の和語の「い・ひ・ゐ」の仮名遣いであるが、語頭（及び語頭相当）の「い・ゐ」については、「ゐ」の一部の語を対象とするにとどめる。語頭は、「は・わ」同様単純な書き分けで、殆どは「い」でありその語数はかなり多い。一方「ゐ」が示される語は限定されており、これも久保田（二〇一四）

で触れた（丁はこれに示したので略す）漢字表記「居」の語（「ゐながら　坐　乍居」・「なみゐる　並居」や「どゐ　土居」・「とりゐ鳥居」など）、漢字表記「井」の語（「ゐげた　井桁」（四ウ）・「ゐづゝ　井筒」（同）や「くもゐ　雲井」（一オ）・「ゆゐ　油井〔駿州〕」（一三オ）・「みゐてら　三井寺」（二七ウ）（五四オ）・「ふぢゐてら　葛井寺」（二八オ）など。久保田（二〇一四）にも引いた「文字に此井を書はいづれも此ゐをかく也」のほか、「上にも下にても井といふは皆ゐ也」（二五ウ）などの記述あり）以外は少ない。以下、その幾つかの語頭「ゐ」の語と、語中語尾の「い・ひ・ゐ」の語を対象に、和語の仮名遣いを見ていくことにする。(9)

二

『仮名文字遣』とは異なる点があるのかを窺うのが今回の目的なので、まずは『初心仮名遣』において『仮名文字遣』板本とは異なる仮名が示されている語を見ることにする。

『仮名文字遣』には「ひ」とあるのに、『初心仮名遣』ではその「ひ」を誤りとして掲げ「い」を正しいとしているものに、

めひ　めい　姪　（一八ウ）
たらひ　たらい　盥盤　（四〇オ）
すひかづら　すいかづら　忍冬　（四五オ）
かひこ　かいこ　蠶　（五六オ）
わさわひ　わざはい　禍　（七七ウ）

があり、誤りとして掲げる仮名は異なるが、同じく「い」を正しいとするものに、

あじさへ　あぢさい　紫陽花〔和名〕（四五オ）

がある。また、『仮名文字遣』では「ゐ」とあるのに、同じく「い」を正しいとするものに、

ゑひ〔ゐ〕　えい　海鰩　鱏同　（五九ウ）

がある。

これらは『仮名文字遣』板本では、「めひ　姪」（ひ部）、「たらひ　盥（以下略）」（ひ部）、「すひかつら　忍冬草」（ひ部）、「あちさひ　紫陽花」（ひ部）、「かひこ　蜑　蠶」（ひ部）、「わさはひ　災　禍　殃」（ひ部・は部）、また「えゐ　鱏　鱏〔魚〕」（え部）・「えゐ鱏　鱏」（ゐ部）となっている。

これらの語の仮名遣いについて、当時の代表的なものとしてしばしば取り上げられる仮名遣書で、『初心仮名遣』と同様いわゆる仮名遣い辞典の形式の書である『類字仮名遣』（寛文六年刊）も見ておきたい。「めひ　姪〔二人／丸秘〕外姪〔各和名〕」、「たらひ　盥　手洗〔俗用〕」、「すひかつら　忍冬草〔二人／丸秘〕」、「かひこ　蜑　蠶　蚕（テン）」、「わざはひ　〔災　禍　殃　二人丸秘　難／妖気　日本紀　乱　同〕」、「あぢさひ（へ共）　紫陽花〔二人丸秘〕」、「えゐ　鱏　鱏〔二人丸秘／各魚名〕」となっていて、うち5語に「二人丸秘」とあることからも窺えるとおり、全て『仮名文字遣』板本と一致している。

また、『初心仮名遣』と同じ元禄期に刊行され、やはり仮名遣い辞典形式の、『倭字古今通例全書』（元禄九年刊）も見ておく。「めい　姪」、「たらひ（イ）　盥」、「すひかづら　忍冬〔又金銀花／卜云〕」、

「かひこ〔古書ニかいこ又用〕　蠶〔作蚕俗也順倭ニハこかひト訓ス（以下略）〕」、「わざはひ　災〔（略）〕」、「あぢさい〔あづさいトモ〕紫陽花〔白氏文集ニ／又ー草トモ〕」、「えゐ　鱣〔（略）〕」となっていて、こちらは、「めい」と「あぢさい」が『初心仮名遣』と共通し、「たらひ」「すひかづら」「かひこ」「わざはひ」「えゐ」は『仮名文字遣』と一致している。

『仮名文字遣』とは異なる「ひ」を正しいとしているのは次の語である。

そこい　そこひ　底居　底井　（八三ウ）

さいわい　さいはひ　幸　福　（一〇〇オ）

これらは『仮名文字遣』板本では、「底井」のほうは「そこゐ　底井〔袖中抄／在之〕」（ゐ部）であって「ゐ」を、「幸」のほうは「さいはい　幸　福　祐」（い部）・「さいはい　幸　福」（は部）で「い」を示す。（これは「つゝらおりかなつかひ」も「さいはい幸」い部）

『類字仮名遣』は、「そこゐ　底居　底井〔袖中抄ニ在之／二人丸秘〕」、「さいはい　幸　福　祐〔二人／丸秘〕頼　祚〔日本／紀〕」で、これまた『仮名文字遣』どおりであり、どちらにも「二人丸秘」の注記がある。

『倭字古今通例全書』は、「そこゐ　底意〔袖中抄ニ又ー井（以下略）〕」は『仮名文字遣』と一致するが、「さいはひ　幸〔又貴又福（以下略）〕」は『初心仮名遣』と一致する。やはり、『初心仮名遣』が「い」とする語の場合と同じく、やや『初心仮名遣』に近い面がある。

『仮名文字遣』と異なる「ゐ」を正しいとする語は、

いぶき　ゐぶき　伊吹　（七ウ）

とある地名の「伊吹」と、

いひ　いゐ　飯〔強飯干飯等／皆いゐとかく也〕（四一オ）

いひお　いゐを　飯尾〔いのをとも〕（二四オ）

いひがい　いゐがい　飯匙　（三八ウ）

いひだこ　いゐだこ　飯蛸　（五八ウ）

などとある、「いゐ」（飯）である。

『仮名文字遣』板本では、「伊吹」は「いふきやま　伊吹山」（い部）、「飯」は「むしいひ　烝飯」（ひ部）・「いひかいとりてけこのうつはものにもる　家子器〔伊勢物語ニ有〕」（い部）・「いひかしく　爨　飯炊」（い部）・「いひうへ　饑」（へ部）・「かれゐひ　餉（以下略）」（ゐ部）などとなっている。

これらは、『類字仮名遣』では、「いぶきやま　伊吹山」であり、また「いひうへ　饑〔二人丸／秘〕餱（コウ）　凶年〔日本／紀〕飯飢」・「いひかしく　爨　飯炊〔二人丸／秘〕」・「いひがいとりてけこのうつはものに　〔飯掻取家子器／在二伊勢物語一二人丸秘〕」、「いひだこ　飯章魚」・「いひのお　飯尾〔名字〕」などがあるから、やはり『仮名文字遣』とほぼ同じである。

一方『倭字古今通例全書』には、「ゐぶき〔いふきトモ〕　異吹〔又伊吹トモ（以下略）〕」とあり、また「いゐ（古書ニいひ不用）飯〔作飯俗同訓ニ食ノ字倶ニおものトモ／めしトモ訓ス附いゐうへ饑〕」・「い

ゐがい　(略)」・「いゐのお　飯尾」などがあり、これまた『初心仮名遣』のほうに一致する(「いぶき」も示す点は異なるが)。

このように、『初心仮名遣』が『仮名文字遣』と異なる仮名を示している語の中には『倭字古今通例全書』と一致するものがあり、当時共通の考え方に基づく変更であったことが窺われる。しかし『類字仮名遣』は全く『仮名文字遣』と変わらない。定家仮名遣いにそのまま従おうとする考え方も、当然ではあるが存在したことも改めて確認できた。三つの仮名遣書のなかでは、『初心仮名遣』が最も『仮名文字遣』から離れたものになっていることが分かり、前回の活用語尾の検討結果とはやや異なる印象である。

なお、『初心仮名遣』と『倭字古今通例全書』が同じ仮名遣いを示している語の中には、坂梨(一九八〇)が指摘する近松作品の「めい」[10]や、久保田(二〇一三)に示した西鶴作品の「さいはひ」[11]のように、当時の文学作品と共通の表記のものがある。これらが当時の考え方を反映した表記であることが分かる。

また、仮名遣いが比較的近い『倭字古今通例全書』においても「い」ではない仮名で示される幾つかの語が、他の仮名遣書において「い」の語として示されることがある。例えば、三条西実隆の著と伝える『仮名遣つゝらおり』の「つゝらおりかなつかひ」には、最初の「い」部に、「たらい　盥」「かいこ　蠶」「わさはい　災　禍」がある。『倭字古今通例全書』の「い」の「めい　姪」「わざはい　災」と重複しないのは偶然であろうが、それでも『初心仮名遣』の「い」6語のうち5語は他の仮名遣書と共通するということは、これらの「い」の主張がやはり独断に基づくものでないということを窺わせる。最初に引用した序文の一節の中に「先達の古書によりてまじへ集めて記す」とあるから、『仮名文字遣』を中心としながらも、複数の書物の主張を取捨選択したということであろう。

三

続いて、『仮名文字遣』板本と一致する部分があるが、一致しない部分もあるというものについて見ることにする。

まず、『仮名文字遣』では複数の仮名が示され、『初心仮名遣』は一つの仮名のみ示しているものを見る。

『仮名文字遣』では三つの部にそれぞれ掲げられるのに、『初心仮名遣』はそのうち一つの仮名のみを正しいとしている語として、

なましい。なましゐ　愁　(八五ウ)

がある。『仮名文字遣』板本では、「なましひ〔なましゐ共／なましい共〕愁」(ひ部)・「なましい〔なまし／ゐ共〕」(ゐ部)と、全ての仮名で掲出される。『類字仮名遣』は「なましゐ〔なましひ共／なましい共〕　愁　愁〔二人丸秘〕」で、やはり『仮名文字遣』と同じく全ての仮名を示すが、見出しの仮名が「ゐ」である点は注目される。『倭字古今通例全書』は「なましゐ　愁〔作愁／俗〕」で、これまた『初心仮名遣』と同じ一つの仮名のみ示している。

次に、『仮名文字遣』では二つの仮名が示されているのに、『初心仮名遣』ではその二つのうちの一つの仮名のみとなっているものを

挙げる。『仮名文字遣』板本では二つの部に見出し語として掲げられている語が、『初心仮名遣』では、

あいよめ　あひよめ　妯　娌　同（右の項に「和名」とある）（一七ウ）

うないこ　うなひこ　同（右に「童子」）（一八オ）

めしい　めしひ　瞽（三五ウ）

ころおひ　ころほい　比　旬　黎（九五ウ）

のように、「ひ」のみまたは「い」のみで示される。これらは『仮名文字遣』板本では、「あひよめ　妯　娌　姪」（ひ部）・「あいよめ　妯　娌」（い部）、「うなひこ　垂髪」（ひ部）・「うないこ〔童子　万葉在之／又童女　うないおとめと云也〕」（ゐ部）、「めしひ〔めしゐ／とも〕盲」（ひ部）・「めしゐ　盲」（ゐ部）、「ころほひ　比　黎」（ひ部）・「ころほい　比　旬〔ころほひ／とも〕」と複数の部においてそれぞれの仮名を示している。

これらについて、『類字仮名遣』は、「あひよめ〔あいよめ／とも〕妯　娌　姪〔二人丸秘〕」、「うないこ〔うないと／はかりも〕垂髪　童子〔万葉／二人丸秘〕」、「めしひる〔めしひ／と斗も〕盲〔二人丸秘〕」、「ころほひ　比　旬　黎〔二人／丸秘〕」となっていて、示された二つの仮名がやはり『仮名文字遣』と一致する。

しかし『倭字古今通例全書』は、「あひよめ　妯（以下略）」、「うないこ　垂髪〔（略）〕」、「めしひ　瞽〔（以下略）〕」、「ころほひ　比及〔（略）〕」であり、2語は『初心仮名遣』と同じく「ひ」の仮名のみ示す。（「うないこ」・「ころほひ」は一つの仮名のみ示す点は共通するが、「ゐ」・「ひ」であるというところが異なる。）

これらのうち、「めしひ」については、「み、しひ」との関連が考慮されたためであろうと考えることができる。次節に示すとおり、「み、しひ」は『仮名文字遣』でも「ひ」のみ示している。

また、『仮名文字遣』での掲出は一つの部だけであるが、「～とも」としてもう一つの仮名も示す語が、『初心仮名遣』では、

くい　くゐ　杭（四〇オ）

ついで　つゐで　次（八四オ）

ういごと〔ハツコト也〕うゐごと　初事　初言（同）

のように一つの仮名のみ示されるというものがある。これらは『仮名文字遣』板本では、「くい〔くゐ／とも〕」（い部）、「ついて〔つゐて／とも〕次」（い部）、「うひこと〔うゐ／とも〕初言」（ひ部）となっている。全て小書きの「ゐ」の仮名のほうを『初心仮名遣』が選択している点が注目される。

『類字仮名遣』では、「くゐ〔くい共〕杭〔二人／丸秘〕（以下略）」、「つゐて〔ついて共〕次〔二人／丸秘〕第〔日本／紀〕（以下略）」、「うゐごと　初言」となっている。ここで初めて、「うゐこと」という、『仮名文字遣』と完全一致でなく、『初心仮名遣』のほうに一致する語を見ることができた。他の2語は、「二人丸秘」とあるように示す仮名は『仮名文字遣』に完全一致であるが、「い」ではなく、『初心仮名遣』と同じ「ゐ」のほうを見出しに掲げ、「い」は「～とも」のほうに示すという相違が見られる点が興味深い。

『倭字古今通例全書』は、「くゐ　杭〔略〕」、「ついで〔古書つゐ

てトモ〕次〔又序又継（以下略）〕で、「初言」はない。「杭」は『初心仮名遣』と一致するが、「ついで」は異なる。

これらを「ゐ」に限定する点については、前節の「いゐ」（飯）も合わせ、夙に時枝（一九四〇）が紹介する、当時の仮名遣書に見られる、活用に関わらないものを「ゐ」とする類の記述のような意識が、反映していると考えられる。

更に、『仮名文字遣』が三つの仮名を掲げ、『初心仮名遣』は二つの仮名を示すものに、

こひ　こい〔ひとも〕　鯉　（五八ウ）

があり、『仮名文字遣』板本では「こひ〔こゐ共／こい共〕　鯉　鮖」（ひ部）・「こい　鯉　鯉」（い部）・「こゐ　鯉　鯉」（ゐ部）と全ての仮名が示され、『初心仮名遣』では「い」を掲げ「ひ」もあるとする。『類字仮名遣』は「こい〔こひ共／こゐ共〕　鯉　鮖〔二人丸秘〕」で、やはり『仮名文字遣』と同じく全ての仮名を示すが、見出し語は『初心仮名遣』と同じ「い」になっている。『倭字古今通例全書』は、「こい　鯉〔（略）〕」で、「い」のみになっている。

以上は『初心仮名遣』の示す仮名のほうが少ないものであるが、反対に、『仮名文字遣』では一つの仮名のみであるのに、『初心仮名遣』では二つの仮名が示されているものが1語ある。

あるいは　あるひは〔いトモ〕　惑〔二人丸ー〕　（九八ウ）

である。『仮名文字遣』板本には「あるひは　或」（ひ部）とあって「ひ」のみ。右のように「二人丸ー」とあるのに、『仮名文字遣』にはない「い」をも『初心仮名遣』が示す点は注目される。（あるいは、大書きで示す「ひ」の根拠が「二人丸ー」ということであろうか。漢字表記の典拠としてこのような注記をすることもあることは、他の項を見ると分かるが、ここは漢字が異なっている。但し「惑」は誤りと見られる。）『類字仮名遣』は「あるひは〔あるはと／斗も〕　或〔二人丸秘〕」、『倭字古今通例全書』は「あるひは　或〔（略）〕」で、ともに『仮名文字遣』と一致する。

『仮名文字遣』は二つの仮名であるが、『初心仮名遣』では三つ全ての仮名を示すものとして、

よひ　よい　宵　（五オ）

よいまどい　よゐまどひ（同）　宵惑　（八ウ）

まつよい　まつよひ　待宵　（九三オ）

こよい　こよゐ（ひ）共ニ用　今宵　今夜　（九六オ）

などの「宵」がある。「宵」は「い」を、「宵惑」は「ゐ」・「い」を、「待宵」は「ひ」を、「今宵」は「ひ」・「ゐ」を示し、結局三つとも示されるが、『仮名文字遣』板本には「こよひ　今宵」（ひ部）や「よゐあかつき　宵暁〔よひ共〕」（ゐ部）、「まつよひすきて　待宵過」（ひ部）などがあり、「ひ」と「ゐ」が示されている。

『類字仮名遣』には、「よゐあかつき〔よひとも／下同〕　宵暁〔二人／丸秘〕　初夜五更〔万葉〕」、「こよひ（ゐ共）　今宵　今夜〔二人／丸秘〕」があって、『仮名文字遣』と同じと言える（「こよひ」に「ゐ共」と注記する点は異なるが）。

『倭字古今通例全書』には「よゐづき〔よひ共〕　宵月〔ゐひノ差別用所ニナラヒアリ／附よは夜半〕」、「こよひ〔こよゐトモ〕　今宵

〔今夜二ツノ／仮名ニワケ有〕」があり、これらの語の場合は『仮名文字遣』と一致している。

この「宵」については、右の『倭字古今全書』の「宵月」に「差別用所ニナラヒアリ」とあることから、「宵」を含む語によって仮名が異なるという意識があったようである。従って、『初心仮名遣』が『仮名文字遣』より多い仮名を示すのは、「あるひは」1語のみと言ってよい。

なお、両書とも二つの仮名を示すものの、一致しないものとして、

やなくい。　やなくひ〔い共吉〕　箙熬　（三十六ウ）

があり、「ひ」を掲げ「い」も示すが、『仮名文字遣』板本では「やなくひ〔やなくゐ／とも〕　箙（以下略）」（ひ部）・「やなくゐ　箙（以下略）」（ゐ部）となっていて、「ひ」と「ゐ」である。『類字仮名遣』は「やなぐゐ〔やなぐひ／とも〕　箙　箙簾　胡　〔二人／丸秘〕」でやはり「二人丸秘」とあって『仮名文字遣』と同じ仮名を示す。『倭字古今通例全書』は「やなぐゐ〔いトモ〕　箙〔（略）〕」で、こちらは更に別の二つの仮名を示すことになっている。

四

最後に、語中語尾「い・ひ・ゐ」の語のうち、『仮名文字遣』板本と同じ仮名を『初心仮名遣』が掲げているものを挙げる。（同じ語と考えてよい語や関連する語などは括弧に入れて左側に示す。）

「い」を正しいとしているのは次の語である。

こまひ。　こまい　梠　（七オ）
をとがひ。　おとがい　頤　（二一オ）
あひさ　あいさ　秋沙　（五八オ）
かひご　かいご　卵子　（五八ウ）
かひま見　かいま見　垣間見　（七八オ）
なひがしろ　ないがしろ　蔑　（八五オ）

これらは、『仮名文字遣』板本には、「こまい　梠」（い部）、「おとがい　頤」（お部）、「あいさ　水鳥也〔（略）〕」、「かいこ　卵」（い部）、「かいま見　闕窺　垣間見　（以下略）」（い部）、「ないかしろ　蔑如」（い部）とある。

「ひ」を正しいとするのは次の語である。

さかい。　さかひ　境　堺同　（三ウ）
（さかいや　さかひや　堺屋　（六二オ））
（さかいせうゆ。　さかひじやうゆ　堺醤油　（六三ノ又一ウ））
やよい。　やよひ　弥生　（四ウ）
おとゝい。　おとゝひ　一昨日　（五オ）
いりあい。　いりあひ　晩鐘　（五オ）
いりあい。　いりあひ　晩鐘　入逢　（一五ウ）
さむらい　さふらひ　侍　士同　（二〇オ）
かいな　かひな　肘　（二一オ）
みゝしい。　みゝしひ　聾　（三五ウ）
あをい。　あふひ　葵　（四四ウ）
（あをいのうへ　あふひのうへ　葵上　（五五オ））
よわい。　よはひ　齢　（七九オ）

かいなし　かひなし　無甲斐　(同)
(かい。　かひ　甲斐　(八オ))
たとい。　たとひ　假令　(八一オ)
たぐい。　たぐひ　類　(八一ウ)
たいらか　たひらか　平　均　(八二オ)
うかいする　うがひ　漱　鵜飼　(八七ウ)
ふなよそい。　ふなよそひ　艤〔舟ニノラント／コシウユル也〕
　舟竟(同)万葉　(九五オ)
あたいカイ物ノ　あたひ　價　直　(同)
あわい　あはひ　交　(九八オ)
あいだ　あひだ　間　(九九ウ)
もとい。　もとひ　基二人ー　(一〇五ウ)

これらは『仮名文字遣』板本には、「さかひ　境　界」(ひ部)、「やよひ　弥生　三月　市姑洗」(ひ部)、「おとゝひ　一昨日」(お部・ひ部)、「いりあひ　晩鐘　黄昏」(ひ部)、「さふらひ　侍　候」(ひ部・ふ部)、「かひな　肘〔此字ヒヂトモ〕」(ひ部)、「みゝしひ　聾」(ひ部)、「あふひ　葵」(ひ部)・「あふひ　葵　藿」(ふ部)、「よはひ　齢」(ひ部)、「かひなし　無甲斐」(ひ部)、「たとひ　仮令　縦　仮使」(ひ部)、「たひらかに　平　夷　坦ー　途ー」(ひ部)、「うかひする　漱」(ひ部)、「あたひ　価　直」(ひ部)、「あはひ　交」(ひ部)、「あひた　間　際　(以下略)」(ひ部)、「もとひ　基」(ひ部)とある。「たぐひ」も「たくひて　類　比　彙」(ひ部)があり一致している。

「ゐ」を正しいとしているのは次の語である。

いぬい　いぬゐ　乾　(一オ)　(〇なし)
いなの　ゐなの　印南野　(一一ウ)
いせき　ゐせき　堰　(一二ウ)
いのこ　ゐのこ　亥子　(四ウ)
いゐ　猪　野猪(イノシヽ)　(六オ)
かしいのうら　かしゐのうら　香椎浦　(一二ウ)
くれない。　くれなゐ　紅　緋　(以下略)　(一六ウ)
(くれないや　くれなゐや　紅屋　(六二オ))
あい染　あゐ染　藍　(一七オ)
くわい。　くはゐ　烏芋　(四五ウ)
しい。　しゐ　椎　(四七ウ)
くまのい。　くまのゐ　熊膽　(四八ウ)
くひな　くゐな　水鶏　(五七ウ)
ういゝし　うゐゝし〔モトニ／用〕　皺　(八八オ)

これらは、『仮名文字遣』板本に、「いぬゐ　乾」(い部・ゐ部)、「ゐなの　猪名野」(ゐ部)・「ゐなみの　印南野〔万葉／在之〕」(ゐ部)、「ゐせき　堰　」(ゐ部)、「ゐのこ　豕　豚」(ゐ部)、「ゐ　猪　豬　王知〔ゐの／し、共〕」(ゐ部)、「かしゐのみや　香椎宮」(ゐ部)、「くれなゐ　紅」(ゐ部)、「あゐ　藍」(ゐ部)、「くはゐ　田烏子」(ゐ部)、「しゐしは　椎柴」(ゐ部)、「くまのゐ　熊胃」(ゐ部)、「くゐな　水鶏　亀鳥」(ゐ部)、「うゐゝし　皺　初敷」(ゐ部)とある。また、

にいあたらしき也　にゐ　新　（六八ウ）
（にいくら　にゐくら　新座　武州　（一〇オ））
（にいばり　にゐばり　新治　常州郡名　（同））
（にいひよし　にゐひよし　新日吉　同（右に「山州」とある）（一三ウ））

があるが、これは『仮名文字遣』板本に「にゐまくら　新枕」（ゐ部）があるので、一致するものとしてよさそうである。

更に、『初心仮名遣』において二つの仮名が示されていて、その二つが『仮名文字遣』板本と一致する語は次の通りである。

「い」・「ひ」が示されているものとして、

ひたい　ひたひ　是は何れも用ゆ　額　（二一ウ）
かいげ　ひ共い共同し　掻器　（二七ウ）
ことい牛　ことひとも用　特牛　（六〇ウ）

があり、「い」・「ゐ」が示されているものとして、

ついに　つゐに共ニ用　終　遂　（八四オ）
いざる　ゐざるトモニ不苦　膝行　居去　（八八ウ）

がある。これらは『仮名文字遣』板本に、「ひたひ〔ひたい／共〕額」（ひ部）・「ひたい〔ひたひ／とも〕額」（い部）、「かひけ　掻笥」（ひ部）・「かいけ　掻笥」（い部）、「ことひ　特牛」（ひ部）・「ことい　特牛」（い部）、「ついに〔つゐ／とも〕終　遂　竟」（い部）・「つゐに　遂　終　竟」（ゐ部）、「ゐざる　膝行　居去〔いざる／とも〕」（ゐ部）とあり、「いざる」は「～とも」として示され、他は二つの部にそれぞれ項目として掲げられているものである。

以上は『仮名文字遣』と仮名が一致するもので、やはり基本的には『仮名文字遣』に近いことが窺える。

なお、『仮名文字遣』板本には掲出されていない語を、一応挙げておく。どのような種類の語が新たに必要と意識されたか等が窺われ興味深いが、今回は列挙するにとどめる。

いなか　ゐなか　田舎　（三ウ）
やらひ　やらい　行馬　楏柘同　（七オ）
いなば　ゐなば　因幡　（七ウ）
うすい　うすひ　碓氷　（一一ウ）
あひやけ　あいやけ　婚姻　（二〇ウ）
あさひな　あさゐな　朝夷那　（二五ウ）
はひたて　はいだて　脛盾　（二七オ）
こうかひ　かうがい　搔枝　笄同　（二九ウ）
むながひ　むなかい　胸懸　（三六ウ）
ほかひ　ほかいゐ共　行器　（三七オ）
あをがひ　あほがい　鈿螺　（三九ウ）
ろかひ舩　ろかい　櫓櫂　（四〇ウ）
まい　むし　まひ　むし　豉虫　（五六オ）
むしくひ　むしくゐ〔い〕　鴛　（五七ウ）
くゞひ　くゞゐ　鵠　（同）
いせごひ　いせこい　鰡魚　（五八オ）
かひらき　かいらぎ　鰔　（五九オ）
かれゐ〔ひ〕　かれい　鰈　（五九オ）

ほどらひ。　ほどらい　大小　（六九オ）
かひどり　かいどり　摑　（七九ウ）
わ（ワ）ひがけ　わ（王）いがけ　輪挂　（七七ウ）
やまあい。　やまあひ　山隘　（九二オ）
あいて　あひて　合手　（九九ウ）
あいづ　あひづ　相圖　（同）

五

今回、『初心仮名遣』の示す和語の「い・ひ・ゐ」について、『仮名文字遣』板本との比較を行った結果、異なる仮名遣いを示す語が、ある程度見られることが分かった。活用語尾の場合とは、やや異なる側面を窺うことができたと言える。部分的な変更にとどまってはいるが、当時の意識を反映して、定家仮名遣いに全面的に従うのではない、やや異なる姿勢が感じられる。

その変更の特徴として挙げられるのは、『仮名文字遣』において語中語尾「ひ」である語を「い」で示すというような伝統的な意識に反する主張が当時の仮名遣書としてはやや多く見られること、『仮名文字遣』において複数の仮名が示されている場合なるべく一つに限定しようとする傾向があること、関連する語は同じ仮名にしようとする意識が見られることなどである。

『初心仮名遣』において、『仮名文字遣』と異なる仮名遣いを掲げている語について、比較を行った『類字仮名遣』と『倭字古今通例全書』とともに、表記をまとめて示しておく。

	仮名文字遣	類字仮名遣	初心仮名遣	倭字古今通例全書
紫陽花	あちさひ	ひ	い	い
蚕	かひこ	ひ	い	ひ
忍冬	すひかつら	ひ	い	ひ
盥	たらひ	ひ	い	い
姪	めひ	ひ	い	い
災	わさはひ	ひ	い	ひ
鱣	えゐ	ゐ	ひ	ゐ
幸	さいはい・	い	ひ	ひ
底井	そこゐ	ゐ	ひ	ひ
飯	いひ	ひ	ゐ	ゐ
伊吹	いふき	い	ゐ	ゐ
鯉	こい			
	こひ	い〔ひ・ゐ〕	い〔ひ〕	い
	こゐ			
愁	なましい			
	なましひ	ゐ〔い・ひ〕	ゐ	ゐ
	なましゐ			

妯	あいよめ	ひ〔い〕	ひ
	あひよめ		ひ
童	うなひこ	ゐ〔ひ〕	ゐ
	うなゐこ	ゐ	ひ
比	ころほい	ひ〔い〕	ひ
	ころほひ	い	ひ
盲	めしひ	ひ〔ゐ〕	ひ
	めしゐ	ひ	ひ
杭	くい〔ゐ〕	ゐ〔い〕	ゐ
次	ついて〔ゐ〕	ゐ〔い〕	ゐ
初言	うひこと	〔ゐ〕	ゐ
或	あるひは	ひ〔い〕	ひ

以上はあくまでも『初心仮名遣』が『仮名文字遣』と異なるという語に限っているので、厳密には他の語についても検討してからでないと何とも言い難いが、『類字仮名遣』には『仮名文字遣』にできるだけ従おうとする傾向があり、[12]『初心仮名遣』にはある程度そこから離れて新しさを求める傾向があり、『倭字古今通例全書』にはその中間的な傾向があるという特徴を見ることはできそうである。

『初心仮名遣』と『倭字古今通例全書』との共通性については、この二書が意義分類を採用していることが理由の一つとして考えられる。対して『類字仮名遣』は第二字までのイロハ順で、意義分類の体裁をとっていない。『倭字古今通例全書』はイロハ別の内部が意義分類になっている。意義分類の場合は関連する語が近くに並ぶことになるので、その点が仮名遣いに影響を及ぼすことがあると見られる。

最初に言及したように、『一歩』を称賛しながら必ずしもその考え方が反映されない部分があったり、字音語を中心に不可解な表記があったり、また誤りかと見られる箇所も散見するなど、不統一な面も見受けられるのではあるが、当時の意識が窺われる興味深い特徴を有する仮名遣書であることは確かである。他の仮名の検討も含め更なる考察が必要な資料と言える。

注1　例えば山田（一九二九）が、「抑も定家流の仮名遣は室町時代を経、江戸時代に入りても盛んに行はれしが、……これらの中には定家仮名遣の誤を訂せりと称するものもあれど、要するに、この主義の範裡を出づるものにあらざるなり」と述べるような状況だったと言える。なお、以下、文献の引用をする際、仮名遣書の項目等の掲示も含め、漢字は〔一〕に入れて示す。また改行箇所を「／」で示すことがある。小書きの注記は省いて示すこともある。）

2　『仮名文字遣』を「二人丸秘抄」とする誤りについては夙に指摘されているとおりで、例えば赤堀（一九〇一）には「刊本には、……其附録は

除きたれど、目録には「一定家卿口伝　二人丸秘抄」といふこと、なほ残りたり。されば、類字仮名遣・群書一覧・其他に、仮名文字遣の一名を「二人丸秘抄」といふよしに記せるは、さる附録ありしことを知らで、目録を読みあやまりたるより起れることなり」とある。また、『初心仮名遣』巻末近くの「二人丸秘抄　両用仮名之分」に続く「同唱によつて替仮名」の、「をそれ　恐　おそる時ハお也」（一〇九オ）、「おけ　桶　こおけの時ハを也」（同ウ）などの記述は、大野（一九五二）によって解明された、アクセントとの関連を反映する『仮名文字遣』の部分と殆ど同じ内容である。なお『初心仮名遣』の活用語尾の仮名遣いの特徴的な部分が『仮名文字遣』慶長板本に極めて近いことも久保田（二〇一四）で指摘した。ただし今野（二〇〇三）が述べるように、当時「二人丸秘抄」という書名の本が存在していた可能性を否定するものではない。）なお、以下、『仮名文字遣』を参照する際は、慶長板本（『駒沢大学 国語研究資料第二　仮名文字遣』汲古書院による）を用いた。江戸時代の刊本はこれと殆ど同一である（木村（一九九六）などを参照）ということからこれで代表させることにした（念のため、無刊記本（寛永頃刊）・万治二年刊本・元禄十一年刊本も見たが、該当項目に特に目立つ違いはなかった）。

3　『蜆縮涼鼓集』（元禄八年刊）の「かんなもじづかひ　仮名文字遣」の注記に「或仮名仕トアリ使ノ字可ㇾ然歟親行ノ抄／始也今ソレヲ二人丸秘抄ト号スルハ誤ナルベシ」とあることから、既に近世前期の時点でこの誤りに気付いていたことが分かる。

4　『日本古典文学大辞典』の「初心仮名遣」の項目には、「一部の『仮名文字遣』に付載されている『二人丸秘抄』や『一歩』下巻の影響」とある。『日本語学研究事典』（『国語学研究事典』も同じ）の「初心仮名遣」の項目には、「『一歩』の影響を強く受けたようで、『一歩』の考えを支持する記述がしばしば見られ、一方、同じ定家仮名遣いの流れを汲む『人丸秘抄』に関し、同じ語に二通りの仮名遣いを認めるあり方を非難しているが、……『一歩』および『人丸秘抄』との関係はさらに吟味の余地がある」と記されている。周知のとおり『人丸秘抄』は『仮名文字遣』文明十年本の付録となっているもので（注2の引用にあるように慶長版以下の板本では目次だけあり実体は省かれている）、分量は『仮名文字遣』本体と異なり極めて少ない。「二人丸秘抄　両用仮名之分」に記載されている34語のうち、『人丸秘抄』に掲げられているのは「つゐに」と「おひ」・「うひ」（「おひぬれ」「おひぬれは」・「うひこと」として掲出）のみで、『人丸秘抄』に基づいたとは全く考えられない。一方、『仮名文字遣』板本にはこの34語すべてがあり、ここに記載されているとおり複数の仮名が示されている。続く「同唱によつて替仮名」は、注2に記したとおりの部分であり、このような記述は『人丸秘抄』には当然ながら全くない。更にこの後の「同抄誤之分」は「い二人丸一」「ほ同抄」「ふ同抄」「え同抄」のような項目別に記述を行うが、『人丸秘抄』には「ほ」「ふ」の項目さえない。勿論『仮名文字遣』には「ほ」「ふ」があり、ここで「誤也」とされる見出しの掲出も実際にある。（狩野（二〇〇七）の初めにある解説は要を得ているが、右の事典を詳細な解説としているのでそれに影響されてしまったのか、序文の翻字を「引用ゆる所ニ、人丸秘抄の仮名遣」とする。）また、永山（一九七七）は「『定家仮名遣』『人丸秘抄』の誤りを前述の『一歩』によって訂正しようとしている」と記す。木枝（一九三三）に「定家仮名遣、人丸秘抄の誤りを「一歩」に依つて訂正しようとするのを本義とし」とあるのを踏襲したものとも思われるが、ここに「人丸秘抄」が出てくる理由は不明である。

5　この部分は、いわゆる仮名遣い規則書の形式で、先行書にしばしば見られる法則等を記している。ここにも『一歩』に似た記述が見られる。

6　現代とは異なる意識も見られるが、活用面から『仮名文字遣』の誤りをよく見出している点を久保田（二〇一一）で指摘した。

7　今野（一九九六ａ）は、「たいらかに」について、「和語であり、かつ語中尾に位置するイが「ひ」をもって表記されることは、……〈暗黙の了解〉と思われるが、この「たひらかに」が「い」表記に向かっていることに興味を覚える。……いよいよ〈俗にも渡る〉ことがらになっていくということである」と述べる。字音語が非常に多く収録されていることとも合わせて、『初心仮名遣』に同様の傾向を見出すことは可能であろ

う。それは序文に、この書の性質を示すとしてしばしば引かれる、

抑此仮名古の述作にして其作者さだかならず然るに此仮名書にをいて仮名遣といふ事有其故は奥に見たり偖此書編集する旨聊博識のためには非ず凡仮名を知人の其誤なからんためなれば名付けて初心仮名遣といふ

という記述があることからも窺われる。

8　安田（一九九四）は、「集」についての、シフからシウへの訂正」と「悩・能に対する「こゑフ」」について、「解し難い」とする。

9　他の仮名遣書との比較を行う際、影印本のあるものはそれに拠った（勉誠社文庫117・118『倭字古今通例全書』上・下、和泉書院影印叢刊68『静嘉堂文庫蔵　後普光園院御抄・仮名遣つゝらおり』）。これ以外は板本に拠る。

10　坂梨（一九八〇）には「甥」も「をい」と「い」である点が指摘されている。「甥」と「姪」の関連が意識されるのは当然予想できることである。

11　この語には、島田（一九六六）が紹介する、同じ仮名の繰り返しを避けるという、仮名遣書にある記述のような意識があったかと考えられる。『初心仮名遣』にも同様な記述があることを久保田（二〇一四）で示した。

12　山田（一九四三）が、元禄期までの仮名遣書を挙げるなかでは、『類字仮名遣』について最も多く記述をしながらも「その根本の主義は定家仮名遣に従ひ、「お」「を」の如きは全くそれに盲従せるものなり」と述べる、そのような性質が「お・を」以外にもこの書にはあると見られる。

参考文献

赤堀又次郎（一九〇一）『語学叢書　第一巻』（東洋社）解題
大野晋（一九五二）「仮名遣の起原について」（『国語と国文学』第二十七巻十一号）
木枝増一（一九三三）『仮名遣研究史』（賛精社）
木村晟（一九九六）「仮名文字遣　開題」（『古辞書研究資料叢刊　第一一巻』大空社）
狩野理津子（二〇〇七）「『初心仮名遣』索引（上）」（『国語文字史の研究十』和泉書院）
久保田篤（二〇一一）「『一歩』下巻の仮名遣い説について」（『成蹊国文』第四十四号）
久保田篤（二〇一三）「貞享期西鶴本の仮名遣い――『諸艶大鑑』と『好色一代女』の場合――」（近代語学会編『近代語研究　第十七集』武蔵野書院）
久保田篤（二〇一四）「『初心仮名遣』の示す仮名遣いについて――活用語尾を中心に――」（『成蹊国文』第四十七号）
今野真二（一九九六a）「かなづかいの転換期――近衛家陽明文庫蔵本『土左日記』を中心資料として――」（『国語国文』第六五巻第三号、『仮名表記論攷』（清文堂）所収）
今野真二（二〇〇三）「『類字仮名遣』の辞書的傾向」（『国文学研究』一四一号）
坂梨隆三（一九八〇）「曽根崎心中の「い・ひ・ゐ」について」（近代語学会編『近代語研究　第六集』武蔵野書院、『近世の語彙表記』（武蔵野書院）所収）
島田勇雄（一九六六）「連歌師のかなづかい書」（『甲南大学文学会論集』第三二号、『西鶴本の基礎的研究』（明治書院）所収）
時枝誠記（一九四〇）『国語学史』（岩波書店）
永山勇（一九七七）『仮名づかい』（笠間書院）
安田章（一九九四）「平仮名文透視」（『国語国文』第六三巻第九号、『国語史の中世』（三省堂）所収）
山田孝雄（一九二九）『仮名遣の歴史』（宝文館出版）
山田孝雄（一九四三）『国語学史』（宝蔵館出版）

（くぼた・あつし　本学教授）